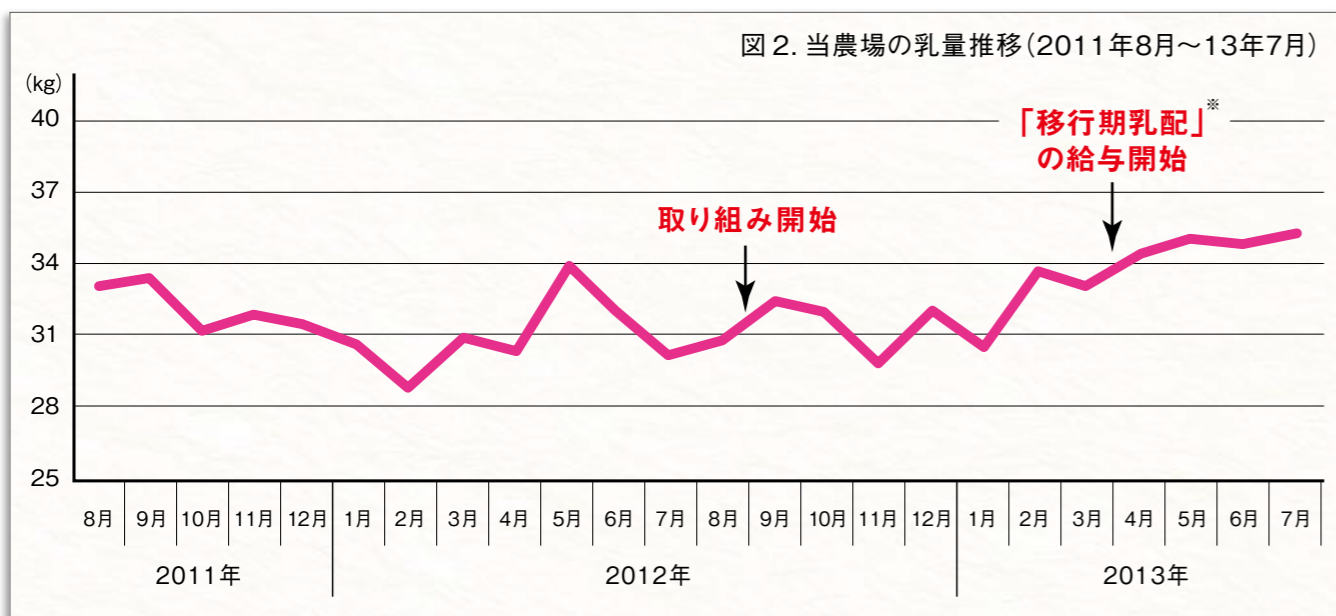
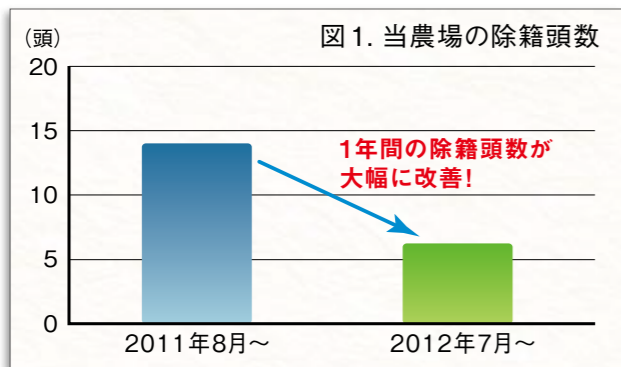


写真上: お腹いっぱい粗飼料を食わせこんだ乳牛
写真下: 給与順序の最後に配合飼料を給与した様子



※JA西日本くみあい飼料が開発した移行期専用配合飼料を指す



基本に返った飼養管理で

移行期を 乗り切れ!

CASE STUDY

所在地: 中国地方
飼養頭数: 経産牛30頭
従業員: 2名(+搾乳1名)

牛の分娩前後の管理は、事故率、乳量、さらには繁殖成績に大きな影響を与える。酪農経営にとって最も重要なこの時期をどう乗り切るか。基本に立ち返った飼養管理で成績向上を実現した事例を紹介する。

しっかりと観察してから粗飼料を給与

乳牛を飼育するうえで最も基本的なことは、「牛をしっかりと観察すること」である。

当農場では、100gでも多くの粗飼料を食べさせるために、牛の状態に合わせた給与方法を行っている。これにより以前と比べて良い成績を上げられるようになった。

具体的な方法としては、それぞれの牛の嗜好性に合わせて、現在使っている粗飼料のオーツハイ、スーダンハイの給与量を変更するということだ。一番先に食べさせる草種についても、乳牛が多く食べるほうをしっかりと食わせるようにしている。

以前は粗飼料を自動給餌機により給与していたため、個体ごとにどれだけ食べているのかを把握することができなかった。また、あまり食い込めない草種でも、何とか食べさせるようにしていた。そのため、粗飼料を十分に食べられた牛もいれば、あまり食べられなかった牛もいて、結果的に分娩後の事故などにより淘汰される牛も多かった。このことは数年間続いている代謝プロファイルでも指摘されていた。

現在は、十分に粗飼料を食い込ませているため、ルーメンがしっかりと張っている乳牛がほとんどだ(写真)。その結果、図1のとおり、農場の淘汰頭数も減少。特に直近9カ月では死亡事故は発生していない。さらに牛群のコンディション自体が底上げされて、乳量も増える結果となった(図2)。

ボディコンディションも安定

泌乳ステージでも牛の観察がしっかりとなされている。ポイントとして挙げられるのが、「①分娩後の配合飼料の増給速度」、そして「②乾乳前の配合飼料の給与量」だ。

分娩後の増給速度があまりに速すぎると、ルーメンが適応できず、ルーメンアシドーシスに陥る恐れがある。しかしその一方で、増給速度が遅すぎてもエネルギー不足に陥る危険がある。

当農場では、分娩後のエネルギー不足を補うために、分娩前の2週間と分娩後1週間にプロピレングリコールを給与し、分娩後の配合飼料の増給速度をうまくコントロールしている。

乾乳前の配合飼料の給与量は、「牛乳は粗飼料で搾る」ということを念頭に、乳量が落ちてきたら配合飼料の給与量も落としている。

以前は配合飼料の給与量をなかなか落とせず、乾乳時の乳牛のボディコンディションもばらつく傾向にあった。現在では乾乳時の乳牛のボディコンディションは安定し、かつ、肥っていない状態を維持できている。

これらの改善は農場とJA西日本くみあい飼料の担当者が一体となって取り組んでいる。次に取り組みたい課題は、育成牛の飼養管理の改善。初産牛に少しでも多くの粗飼料を食べさせるようにして、さらなる成績改善につなげていく。